



# 尾間木中だより

学校教育目標  
豊かな心をもち、  
たくましく生きる生徒

平成 30年 2月 1日 第10号

〒336-0926  
電 話  
F A X

さいたま市緑区東浦和4-29-1  
048-874-9733  
048-810-1127



## 「ピンチをチャンスに！ 雪国の取り組み」

校長 堀 田 明 良

1月下旬には数年ぶりの大雪が降り、本校生徒も大きな影響を受けました。1年生にとっては館岩少年自然の教室3日目に当たり、大雪による東北自動車道の渋滞により学校到着が予定時刻より大幅に遅れました。そのような中でも多くの保護者の皆様が出迎えてくださり、ありがとうございました。2年生は大雪の翌日に鎌倉校外学習を実施しました。幸い交通機関は大きな混乱もなく、2学年の生徒たちは雪景色の鎌倉散策を満喫しました。3年生は私立入試中心日でしたが、事前の対策と早めの出発のため大きな混乱もありませんでした。

我々関東地方の平野部に住んでいると降雪はめったにないことですが、日本は国土の約半分の面積が豪雪地帯に指定されている世界でも珍しい国です。大雪の降った年はその年号を取り、「三八豪雪」「五九豪雪」などと呼ばれ語り継がれています。昭和38年に起こった「三八豪雪」は山間部の過疎化が進んだきっかけのひとつとして社会科日本地理の教材にも取り上げられていました。昭和59年「五九豪雪」の年は私にとって教師になりたての年で当時の生徒たちと雪遊びばかりしていた思い出があります。最近では平成26年の大雪でソフトテニス県大会の会場に使用されるくまがやドームの屋根がつぶれてしまったことがありました。

雪の影響というと、鉄道、航空機などの交通機関のマヒ、道路の除雪、家の屋根の雪下ろしなど、大変なことばかり思い浮かびます。人口約230万人の新潟県が年間で使う除雪費用は平均64億円です。除雪費用は除雪車の購入、管理のほか、除雪した雪を川に捨てたり、融雪剤を買って撒いたり、雪を解かすため水を流す融雪パイプの維持管理などに使われます。雪国ではこれだけ多くの費用を使って日常生活を維持しているのです。それだけではなく、雪を克服するため多くの時間と労力もかかっているのです。

ところが、この雪の悩みを解決する一方で雪を利用して新しい価値を生み出す「利雪（りせつ）」が行われています。雪だるま財団チーフスノーマン（主任研究員）であり、工学博士の伊藤親臣（いとうよしおみ）氏の著した「空から宝ものが降ってきた！ 雪の力で未来をひらく」によると、伊藤氏は新潟県上越市にある安塚小学校に冬に降った雪を貯蔵して行う世界初の雪による冷房設備をつくりました。2年後には安塚中学校も全教室雪による冷房導入のほか、雪解け水をトイレの洗浄水に使い、太陽光発電も利用した自然エネルギーで成り立つ学校につくりかえました。さらに、伊藤氏は2年前に収穫したコメが新米と同じ味で食べられる雪冷蔵システムのコメ貯蔵庫をつくりました。このしくみは電気冷蔵庫が普及する前に雪国で使われていた「雪室（ゆきむろ）」「氷室（ひむろ）」という夏まで雪や氷を貯蔵したり、冷たい場所で食料を貯蔵したりする昔ながらの方法を現代風に発展させたものです。まさに雪国で培われた先人の知恵を現代によみがえらせたのです。

伊藤氏の取り組みから、ピンチをチャンスに変える方法のヒントが見えてきたのではないかと思います。雪国の現状を受け入れ、歴史から学び、現代に通用するように改良する。プラス思考で考え、そして信念をもってやり抜く。成功した時の成成感格別のことと思います。



「なくしたものは取り返せない。でも忘れたものは思い出せばいい。

かつてこの国には雪と共に生きる知恵がありました。

そこに現代の雪の技術を合わせたなら、きっと新しい雪国が生まれるはずです。」

(伊藤 親臣)